# 幼児の分配行動に及ぼす被分配者の努力・能力要因の影響

越中康治・藤澤康恵・新見直子・江村理奈・目久田純一・前田健一

Effects of recipients' effort and ability factors on preschoolers' reward allocation

Koji Etchu, Yasue Fujisawa, Naoko Niimi, Rina Emura, Junichi Mekuta, and Kenichi Maeda

本研究では，幼児の分配行動に及ぼす被分配者の努力・能力要因の影響を検討した。2名の被分配者に対する第三者的立場からの報酬分配について，低貢献者の努力と能力の要因を実験的に操作して検討を行った。その結果，第1に，報酬分配を行う上で幼児は努力要因を考慮し，低貢献者が努力をしていた場合には報酬を高貢献者と等しくする平等分配を行い，努力をしていなかった場合には報酬を少なくする（貢献度に応じた公平分配を行う）ことが示された。第2に，報酬分配を行う上で幼児は能力要因を考慮し，低貢献者が高能力であるにもかかわらず努力をしなかった場合には，低能力で努力をしなかった場合よりも，報酬を少なくすることが示された。幼児が，低貢献者の努力と能力とを考慮した上で，公正な分配を行う傾向にあることが示された。

キーワード：幼児，分配行動，努力要因，能力要因，公正

## 問題と目的

幼児の分配行動に関する研究は，当初，自分が被分配者の1人となる分配場面において貢献度の異なる相手と自分とに報酬を分配する行動について，公平理論から説明できるのか，平等理論から説明できるのかを問題としてきた（Lane & Coon, 1972; Leventhal & Anderson, 1970）。Leventhal & Anderson（1970）は，5歳児を対象とした研究において，男児では，自分の貢献度が相手よりも高い場合には自分の報酬を多くし，相手の貢献度が高い場合には自分と相手の報酬を等しくすること，女児では，条件にかかわらず報酬を等しくすることを見出した。Leventhal & Anderson（1970）は，この結果を，女児には効果が認められなかったとしながらも，公平理論を支持するものとして考察した。一方，Lane & Coon（1972）は，4，5歳児を対象として同様の手続きの研究を行い，4歳児は条件にかかわらず自分の報酬を多くする傾向にあったが，5歳児では，いずれの条件においても報酬をほぼ等しくするという結果を見出した。実際のところ，5歳児では，自分の貢献度が高い条件においてのみ，男女ともに自分に対する報酬が若干多くなっていたが，この差が有意でなかったことから，Lane & Coon (1972) は，幼児の分配行動が平等理論から説明できるものとして結論づけた。

このように，Leventhal & Anderson（1970）と Lane & Coon（1972）の研究は，結果こそ類似したものであったが，考察が異なっていた。Leventhal & Anderson（1970）は，男児が，自分の貢献度が

高い条件で報酬を多くしたことから，公平分配の傾向があるとみなした。他の条件では，利己的欲求から自分の報酬が半分以下にならぬよう，あえて公平分配を行わなかったとした。一方，Lane & Coon（1972）は，自分の貢献度が高い条件で報酬が多くなったのは利己的欲求によるものであり，他の条件においてはやはり平等分配を行うと解釈した。結果がこのように多様に解釈されてしまうのは，自分が報酬に関与する場面においては，利己的欲求が働くためである。この問題を解決するために，Leventhal, Popp, & Sawyer（1973）は，5 歳児を対象として，利己的欲求の働かない第三者的立場からの分配を求める実験を行った。結果として，幼児は，貢献度の高い被分配者に対して，より多くの報酬を与えた。これは，幼児が，少なくとも第三者的立場からであれば，公平分配をすることを示唆する結果であるといえる。

ところが，本邦において幼児の分配行動と分配立場の問題を取り扱った研究（渡辺，1992）においては，異なる結果が見出されている。渡辺（1992）は，5，6 歳児を①高貢献度条件（参加者自身も被分配者となる 2 者間の分配場面において，参加者の貢献度が 7，相手の貢献度が 3 である条件），②低貢献度条件（参加者自身も被分配者となる 2 者間の分配場面において，参加者の貢献度が 3，相手の貢献度が 7 である条件），③第三者的立場の分配条件（参加者が，第三者的立場から，貢献度が 7 の被分配者と貢献度が 3 の被分配者に分配を行う条件）の 3 つの条件のいずれか 1 つに割り当て，報酬を分配するよう求めた。その結果，8 割以上の幼児がいずれの条件においても平等分配を行った。この結果について，渡辺（1992）は，幼児期においてはステレオタイプ的に平等分配が一般化しているのに対し，公平分配をする認知能力及び日常的経験が少ないために，分配者の立場による影響が明らかにならなかったのではないかと考察している。

しかし，越中・前田（2004）は，渡辺（1992）の研究では幼児が貢献度以外の要因を考慮して報酬分配を行った可能性を指摘した。渡辺（1992）の第三者的立場の分配条件では，被分配者 2 名が先生に依頼されてごみ拾いを行った結果，高貢献者はごみを 7 つ，低貢献者はごみを 3 つ拾ったという例話を用いていた。この例話では，被分配者 2 名の貢献度の違いは条件として明示されているが，努力などの要因は明示されていなかった。少なくとも，被分配者が作業に従事した時間は同じであることを前提としていた。しかし，幼児は被分配者の作業時間や努力などを考慮して報酬分配した可能性が考えられる。そこで，越中・前田（2004）は，貢献度と努力を明確に区別して提示し，第三者的立場から幼児に報酬分配を求めた。その結果，幼児は貢献度の低い被分配者が努力をしていた場合には報酬を均等にする平等分配を行い，努力をしていなかった場合には貢献度に応じて差をつける公平分配を行うことが明らかとなった。本邦における従来の見解とは異なり，幼児期においても公平分配が可能であること，平等分配が幼児の能力や経験の不足によって示されるものではないことが明らかとなった。また，幼児は被分配者の貢献度や努力のみならず，報酬に差をつけることによって葛藤が生じる可能性や低貢献者の情状などをも考慮した上で公正な分配をする傾向にあることが示された。

ところで，越中・前田（2004）の研究では，被分配者の努力のみを操作したが，幼児は被分配者の努力だけでなく能力をも考慮して報酬分配をした可能性が考えられる。つまり，高努力場面では低貢献者を「努力したのにできなかった」と説明して場面設定したが，幼児は「努力したのにでき

なかった」低貢献者を能力が低いと受け止めたかもしれない。つまり，越中・前田（2004）の高努力場面において平等分配が多くみられたのは，幼児が低貢献者の低能力を考慮した結果であるという可能性が残る。能力は，努力とともに Deutsch（1975）の公正な分配の基準に挙げられている要因であり，努力と同様に，幼児でも理解できる要因である。例えば，岩立（1995）は，統制可能性の認知に関する研究の中で，幼児でも努力と能力の両方を考慮して，作業や競争などの結果を予測できることを示している。以上を踏まえると，低貢献者の努力と能力は，幼児の報酬分配に対して，それぞれ異なる影響を及ぼす別々の要因であると考えられるが，幼児を対象にして低貢献者の努力と能力の要因を実験的に操作した研究はこれまで報告されていない。

そこで本研究では，幼児を対象として，低貢献者の努力と能力の要因を実験的に操作し，2 名の被分配者に対する第三者的立場からの報酬分配に及ぼす低貢献者の努力と能力の影響について検討する。岩立（1995）を参考にすると，努力と能力の要因を操作した場面としては，2（能力：高，低）×2（努力：高，低）の組み合わせから 4 場面が設定できる。ただし，本研究では低貢献者の要因を操作するので，高能力・高努力場面で低貢献者を設定することが不自然になってしまう。そこで本研究では，高能力・高努力を除き，高能力・低努力，低能力・高努力，低能力・低努力の 3 場面を設定した。本研究の主な目的は，3 場面の比較を通して，努力と能力の 2 つの要因が幼児の報酬分配にどのような影響を及ぼすのかを検討することである。なお，高貢献者と低貢献者の貢献度の比率は，越中・前田（2004）と同様に 4:1 とする。

本研究の結果は次のように予測される。越中・前田（2004）と同様に，低貢献者の努力の高低によって，低貢献者に分配される報酬の数に違いがみられ，低貢献者が努力しなかった場面よりも，努力した場面の方が低貢献者に分配される報酬の数が多くなると考えられる。また，幼児でも能力の高低を認知することが可能である（岩立，1995）ことから，幼児が能力を考慮して分配行動を行うのであれば，低貢献者の能力が低い場合には，能力が高い場合に比べて，分配される報酬の数が多くなると考えられる。以上のことから，本研究の低貢献者に分配される報酬の数は，低能力・高努力場面で最も多く，次に低能力・低努力場面が多く，高能力・低努力場面で最も少なくなると予測される。

## 方　法

### 参加者と実験時期

東広島市内の保育園に通う幼児 34 名（男児 17 名，女児 17 名）が実験に参加した。このうち年少男児 1 名，年少女児 1 名は後述の手続きにより分析対象から除外した。分析対象者は，年少児 8 名（男児 4 名，女児 4 名），年中児 10 名（男児 4 名，女児 6 名），年長児 14 名（男児 8 名，女児 6 名）であった。実験は，2006 年 1 月上旬に実施した。実験実施時の分析対象者の平均月齢（月齢範囲）は，年少児 52 ヶ月（46 ヶ月-57 ヶ月），年中児 63 ヶ月（59 ヶ月-68 ヶ月），年長児 74 ヶ月（71 ヶ月-80 ヶ月）であった。

### 要因計画

要因計画は，2（年齢：年少，年中，年長）×3（場面：高能力・低努力，低能力・高努力，低能

力・低努力）の2要因計画であった。第1要因は被験者間要因，第2要因は被験者内要因であった。

**材料**

2名の被分配者に対する第三者的立場からの報酬分配場面を提示するために，紙芝居を4種類（等貢献度場面，高能力・低努力場面，低能力・高努力場面，低能力・低努力場面）作成した。等貢献度場面を除く3場面は，いずれも貢献度が4:1となる場面であった。高貢献者（貢献度：4）は一貫して高能力・高努力であったが，低貢献者（貢献度：1）の能力と努力が場面ごとに異なっていた。

各場面の2名の被分配者はいずれも架空の人物（園に新しくやってきた参加者と同性の仲間）であり，保育者から仕事（花飾り4個の色塗り）を依頼されていた。この仕事は，参加者と同じクラスの子どもの場合には頑張れば全部できるが，参加者より1つ下のクラスの子どもの場合には頑張っても全部はできないという設定であった（例えば，年少児に対しては，年少児クラスの子どもは頑張れば全部できるが，年少未満児クラスの子どもは頑張っても全部はできないと説明する）。これら4種類の紙芝居はいずれも3枚から構成されていた。1枚目には被分配者の能力，2枚目には被分配者の努力，3枚目には被分配者の貢献度が示されていた。各場面の内容を以下に示す。

(1) **等貢献度場面**　2名の被分配者はいずれも参加者と同じクラスの子どもであった（1枚目：いずれも高能力）。2名とも保育者に依頼されて頑張って色塗りをした（2枚目：いずれも高努力）。結果として，2名とも，4個全てに色塗りをすることができた（3枚目：2名の貢献度が等しい）。

(2) **高能力・低努力場面**　2名の被分配者はいずれも参加者と同じクラスの子どもであった（1枚目：低貢献者も高能力）。高貢献者は保育者に依頼されて頑張って色塗りをしたが，低貢献者は面倒くさいといって頑張らなかった（2枚目：低貢献者は低努力）。結果として，高貢献者は4個全てに色塗りをすることができたが，低貢献者は1個しかできなかった（3枚目：貢献度が4:1となる）。

(3) **低能力・高努力場面**　高貢献者は参加者と同じクラスの子どもであったが，低貢献者は参加者より1つ下のクラスの子どもであった（1枚目：低貢献者は低能力）。2名とも保育者に依頼されて頑張って色塗りをした（2枚目：低貢献者も高努力）。結果として，高貢献者は4個全てに色塗りをすることができたが，低貢献者は1個しかできなかった（3枚目：貢献度が4:1となる）。

(4) **低能力・低努力場面**　高貢献者は参加者と同じクラスの子どもであったが，低貢献者は参加者より1つ下のクラスの子どもであった（1枚目：低貢献者は低能力）。高貢献者は保育者に依頼されて頑張って色塗りをしたが，低貢献者はどうせできないからと諦めて頑張らなかった（2枚目：低貢献者は低努力）。結果として，高貢献者は4個全てに色塗りをすることができたが，低貢献者は1個しかできなかった（3枚目：貢献度が4:1となる）。

なお，これらの4種類の紙芝居は，登場人物全員が男の子である男児用セットと，登場人物全員が女の子である女児用セットを作成した。さらに，2名の被分配者に対する報酬としてクッキーに見立てたチップ10枚を作成した。

**手続き**

実験は第2著者が個別面接で実施した。各場面の提示後，保育者が2名の被分配者のためにご褒美としてクッキーを10枚用意していたと教示した。さらに，ご褒美のクッキー10個全てを，残さず自分の判断で2名に分けるよう，保育者が参加者に求めたと教示した。以上の手続きにより，参

加者に対して，2 名の被分配者に報酬を分配するよう求めた。参加者が分配し終わった後，それぞれの被分配者に分配されたクッキーの枚数を確認し，分配理由を尋ねた。

実施にあたっては，はじめに等貢献度場面を提示して，参加者が 5:5 の平等かつ公平な分配を行うことができるかを確認した。ここで 5:5 の分配を行うことのできなかった年少男児 1 名を分析対象から除外した。その後，高能力・低努力場面，低能力・高努力場面，低能力・低努力場面の 3 場面をランダムな順序で提示し，報酬分配を求めた。その際，場面を理解しているかどうかを確認するために，低貢献者は頑張れば色塗りを全部できたか（能力があったか），努力していたかどうかについて質問した。この質問に対して間違った返答をした参加者には，再度，場面を提示した。最終的に，低能力・低努力場面を理解することができなかった年少女児 1 名を分析の対象から除外した。

## 結　果

### 低貢献者に対する報酬分配数

低貢献者に対する報酬分配数の平均値を，年齢別，場面毎に示した（Table 1）。低貢献者に対する報酬分配数について 3（年齢）×3（場面）の分散分析を行った。その結果，場面の主効果が有意であった（$F(2, 58)=13.77, p<.001$）。有意水準 5%で Ryan 法による多重比較を行った結果，低貢献者に分配された報酬の数は低能力・高努力場面（$M=4.75$）で最も多かった。高能力・低努力場面（$M=3.30$）と低能力・低努力場面（$M=3.84$）の間に有意差は認められなかった。なお，年齢の主効果，交互作用はいずれも有意ではなかった。

Table 1　各場面における低貢献者への平均分配数（標準偏差）

| | 年少児（$n=8$） | 年中児（$n=10$） | 年長児（$n=14$） |
|---|---|---|---|
| 高能力・低努力場面 | 3.13 (1.69) | 3.70 (1.68) | 3.07 (1.58) |
| 低能力・高努力場面 | 4.75 (2.11) | 4.70 (0.64) | 4.79 (0.41) |
| 低能力・低努力場面 | 3.50 (2.00) | 3.80 (1.47) | 4.21 (1.08) |

### 各場面における分配パターンと分配の理由づけ

各場面における分配パターン（高貢献者の報酬：低貢献者の報酬）と理由づけの人数を場面ごとに示す（Table 2, 3, 4 参照）。本研究では，報酬の比が 5:5 の場合が平等分配であるといえる。また，2 名の被分配者の貢献度の比が 4:1 であるため，正確には，2 名の報酬の比が 8:2 である場合に貢献度に応じた公平分配であるということができる。さらに，渡辺（1992）に従うと，報酬の比が 6:4 及び 7:3 の場合には準公平分配，9:1 及び 10:0 の場合には過剰公平分配であるといえる。以下では，平等分配以外のものは，特別な説明がない限り，準公平分配及び過剰公平分配を含めて公平分配とする。

また，分配の理由づけについては，越中・前田（2004）を参考に，「努力」「能力」「努力と能力」「努力と貢献度」「能力と貢献度」「貢献度」「擁護」「葛藤回避」「紋切り型」の 9 つのカテゴリーに分けた（Table 2, 3, 4 参照）。「努力」は「頑張った（頑張らなかった）から」のように，努力のみに言及した理由づけである。「能力」は「できないからしかたない」のように，能力のみに言及した理

由づけである。「貢献度」は「1個しか作らなかったから」のように，被分配者の貢献度のみに言及した理由づけである。「擁護」は「かわいそうだから」のように，被分配者をかばう理由づけである。「葛藤回避」は「けんかになるから」のように，分配結果によっては葛藤が生じることを配慮した理由づけである。「紋切り型」は「はんぶんこがいい」のように，ステレオタイプ的な理由づけである。「努力と能力」「努力と貢献度」「能力と貢献度」はそれぞれ「努力」「能力」「貢献度」の理由づけを組み合わせて述べたものである。無回答及びこれらの9つの分類のどれにも当てはまらないものは，「なし，その他」として扱った。

**(1) 高能力・低努力場面** 高能力・低努力場面の結果をTable 2に示す。まず，分配パターンについて，平等分配を行った人数と行わなかった人数との間に実質的な差があるかどうかを直接確率計算によって検定した（平等分配の出現確率は50%を仮定した）。分析対象者32名中，平等分配を行った者は10名，公平分配を行った者は22名であり，人数の偏りに有意傾向が認められた（両側検定：$p<.10$）。高能力・低努力場面において，幼児は公平分配を行う傾向にあった。

高能力・低努力場面で平等分配を行った10名の理由としては，「努力」「努力と能力」「葛藤回避」「紋切り型」を挙げた参加者がそれぞれ1名ずつであったが，残りのほとんどは理由づけがなかった。公平分配を行った22名の理由としては，「努力」を挙げた参加者が9名と最も多く，「努力と能力」（5名），「努力と貢献度」（3名）を合わせて努力に言及した参加者を合計すると17名となり，公平分配を行った参加者のほとんどが努力について言及していた。具体的な理由づけは，「（低貢献者は）がんばっていなかったから」や「（低貢献者は）頑張ればできるのにやらなかったから」などであった。

Table 2 高能力・低努力場面における分配パターンと分配の理由づけ

| | 年少児 | | | | 年中児 | | | | 年長児 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 平等 | 準公平 | 公平 | 過剰公平 | 平等 | 準公平 | 公平 | 過剰公平 | 平等 | 準公平 | 公平 | 過剰公平 |
| *n* | 3 | 1 | 2 | 2 | 4 | 3 | 2 | 1 | 3 | 5 | 3 | 3 |
| 努力 | | | 1 | 1 | | | 1 | 1 | 1 | 4 | | 1 |
| 能力 | | | | | | | | | | | | |
| 努力と能力 | | | | | 1 | 2 | | | | 1 | 2 | |
| 努力と貢献度 | | 1 | | | | | | | | | 1 | 1 |
| 能力と貢献度 | | | | | | | 1 | | | | | |
| 貢献度 | | | | | | | | | | | | |
| 擁護 | | | | | | | | | | | | |
| 葛藤回避 | | | | | | | | | 1 | | | |
| 紋切り型 | 1 | | | | | 1 | | | | | | |
| なし，その他 | 2 | | 1 | 1 | 3 | | | | 1 | | | 1 |

注）数値は人数。なお，空白のセルは0人。

**(2) 低能力・高努力場面** 低能力・高努力場面の結果をTable 3に示す。まず，分配パターンについて，平等分配を行った人数と行わなかった人数との間に実質的な差があるかどうかを直接確率計算によって検定した（平等分配の出現確率は50%を仮定した）。なお，低能力・高努力場面では，

年少児1名が，高貢献者よりも低貢献者に対して多くの報酬を分配した（Table 3 では「その他」に分類した）ため，これを除く分析対象者 31 名について分析を行った。平等分配を行った者は 24 名，公平分配を行った者は 7 名であり，人数の偏りが有意であった（両側検定：$p<.01$）。低能力・高努力場面において，幼児は平等分配を行う傾向にあった。

低能力・高努力場面で平等分配を行った 24 名の理由としては，「努力」を挙げた参加者が 7 名と最も多く，続いて「努力と能力」を挙げた参加者が 5 名となり，ここでも努力に言及する参加者が多かった。具体的な理由づけは，「（低貢献者が）がんばっていたから」などであった。公平分配を行った 7 名の理由としては，「努力」（2 名），「努力と貢献度」（1 名），「貢献度」（1 名）などがあった。具体的な理由づけは，「（低貢献者は）がんばったけど 1 個しかできなかったから」や「（低貢献者は）1 個しか作ってないから」などであった。

Table 3　低能力・高努力場面における分配パターンと分配の理由づけ

| | 年少児 | | | | | 年中児 | | | | 年長児 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | その他 | 平等 | 準公平 | 公平 | 過剰公平 | 平等 | 準公平 | 公平 | 過剰公平 | 平等 | 準公平 | 公平 | 過剰公平 |
| *n* | 1 | 5 | 1 | | 1 | 8 | 2 | | | 11 | 3 | | |
| 努力 | | | 1 | | | 1 | | | | 6 | 1 | | |
| 能力 | | | | | | 1 | | | | 1 | | | |
| 努力と能力 | | | | | | 2 | | | | 3 | | | |
| 努力と貢献度 | | | | | | 1 | | | | 1 | 1 | | |
| 能力と貢献度 | | | | | | | | | | | | | |
| 貢献度 | | | | | 1 | | | | | | | | |
| 擁護 | 1 | | | | | 1 | | | | | | | |
| 葛藤回避 | | | | | | | | | | | | | |
| 紋切り型 | | 2 | | | | | 2 | | | | | | |
| なし，その他 | | 3 | | | | 2 | | | | | 1 | | |

注）数値は人数。なお，空白のセルは0人。

Table 4　低能力・低努力場面における分配パターンと分配の理由づけ

| | 年少児 | | | | 年中児 | | | | 年長児 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 平等 | 準公平 | 公平 | 過剰公平 | 平等 | 準公平 | 公平 | 過剰公平 | 平等 | 準公平 | 公平 | 過剰公平 |
| *n* | 5 | | 1 | 2 | 5 | 3 | | 2 | 7 | 6 | | 1 |
| 努力 | | | 1 | 1 | | 1 | | | 2 | 5 | | 1 |
| 能力 | | | | | | | | | 2 | | | |
| 努力と能力 | | | | | 1 | | | | | | | |
| 努力と貢献度 | | | | | | 2 | | 1 | 1 | | | |
| 能力と貢献度 | | | | | | | | | | 1 | | |
| 貢献度 | | | | | | | | | 1 | | | |
| 擁護 | | | | | 1 | | | | | | | |
| 葛藤回避 | | | | | 1 | | | | 1 | | | |
| 紋切り型 | 2 | | | | | | | 1 | | | | |
| なし，その他 | 3 | | | 1 | 2 | | | | | | | |

注）数値は人数。なお，空白のセルは0人。

(3) **低能力・低努力場面**　低能力・低努力場面の結果をTable 4に示す。まず，分配パターンについて，平等分配を行った人数と行わなかった人数との間に実質的な差があるかどうかを直接確率計算によって検定した（平等分配の出現確率は50%を仮定した）。分析対象者32名中，平等分配を行った者は17名，公平分配を行った者は15名であり，人数の偏りは有意でなかった。低能力・低努力場面で平等分配を行った17名の理由としては，「能力と貢献度」を除く全カテゴリーの理由が挙げられていた。公平分配を行った15名の理由としては，「努力」を挙げた参加者が9名と最も多かったが，「努力と貢献度」（3名），「能力と貢献度」（1名）を挙げた参加者もいた。具体的な理由づけは，「（低貢献者は）がんばってないから」や「（低貢献者は）1つしかできてないから」などであった。

## 考　察

本研究の目的は，被分配者の努力と能力が幼児の報酬分配に及ぼす影響を検討することであった。主な結果は，努力と能力が幼児の報酬分配にそれぞれ異なる影響を及ぼし，本研究の予想を支持するものであった。低貢献者に対する報酬分配数は，高能力・低努力場面及び低能力・低努力場面よりも，低能力・高努力場面で多かった。また，低能力・高努力場面では平等分配が多く見られたのに対して，高能力・低努力場面では公平分配が多く見られた。以上の結果から，第1に，報酬分配を行う上で幼児は努力要因を考慮し，低貢献者が努力をしていた場合には報酬を高貢献者と等しくする平等分配を行い，努力をしていなかった場合には報酬を少なくする（貢献度に応じた公平分配を行う）ことが示された。これは，越中・前田（2004）を支持する結果であった。第2に，報酬分配を行う上で幼児は能力要因を考慮し，低貢献者が高能力であるにもかかわらず努力をしなかった場合には，低能力で努力をしなかった場合よりも，報酬を少なくすることが示された。

また，理由づけにおいては，参加者の約半数が，いずれの場面においても，低貢献者の努力の有無に言及していた（高能力・低努力場面：19名，低能力・高努力場面：17名，低能力・低努力場面：16名）。このことは，幼児が報酬分配を行う上で，特に努力を重視していることを示す結果であるといえる。一般に，努力と能力の相補的な関係を大人と同様に理解できるようになるのは小学校低学年から中学年であるとされる（岩立, 1995）。例えば，岩立（1995）は，努力と能力の組み合わせの異なる登場人物4人のかけっこの順位を予想させた結果から，幼児でも努力と能力の2つの要因を考慮して結果を予測できるが，幼児は能力よりも努力を重視した判断を行うと指摘している。本研究の結果も，幼児が能力以上に努力を重視することを示唆するものであった。今後，努力と能力の要因については，児童期以降の子どもを対象として，報酬分配に及ぼす発達的な変化を検討する必要がある。

最後に，今後の課題として，貢献度の提示に関する問題を指摘しておきたい。本研究では4:1の貢献度に対して，正確には8:2に報酬を分配することが公平分配であった。本研究の参加者は低貢献者への報酬に差をつけていたが，8:2の正確な公平分配を行った者は3つの場面を合わせても延べ8名（高能力・低努力場面：7名，低能力・低努力場面：1名）しかいなかった。参加者が幼児であることを踏まえると，「4:1 = 8:2」という比の関係が十分に理解できていない可能性もある。その

結果として，報酬分配に及ぼす努力・能力要因の影響が，貢献度の影響よりも相対的に大きくなった可能性も否定できない。原田（1999）は，専門学校生を対象として，第三者的立場からの報酬分配に及ぼす被分配者の業績，能力，努力の影響について検討し，業績が最も重視されることを指摘している。今後の研究では，報酬の数と貢献度との関係について量的・比率的対応がある場合を設定し，努力・能力要因が報酬分配にどのような影響を及ぼすのかを検討する必要がある。

## 引用文献


Deutsch, M. 1975 Equity, equality and need: What determines which value will be used as the basis of distributive justice? *Journal of Social Issues*, **31**, 137-149.

越中康治・前田健一 2004 被分配者の努力要因が幼児の分配行動に及ぼす影響 広島大学心理学研究, **4**, 103-113.

原田耕太郎 1999 被分配者の業績・能力・努力に関する情報が報酬分配に及ぼす影響 社会心理学研究, **14**, 86-94.

岩立京子 1995 幼児，児童における努力，能力要因の関係の理解 東京学芸大学紀要 1 部門, **44**, 59-65.

Lane, I. M., & Coon, R. C. 1972 Reward allocation in preschool children. *Child Development*, **43**, 1382-1389.

Leventhal, G. S., & Anderson, D. 1970 Self-interest and the maintenance of equity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **15**, 57-62.

Leventhal, G. S., Popp, A., & Sawyer, L. 1973 Equity or equality in children's allocation of reward to other persons? *Child Development*, **44**, 753-763.

渡辺弥生 1992 幼児・児童における分配の公正さに関する研究 風間書房


## 付 記


本研究は，第 2 著者が広島大学に提出した卒業論文（平成 17 年度）の一部を修正したものです。本研究にご協力を賜りました保育園の園長先生，保育士の皆様ならびに園児の皆様に深く感謝いたします。